

親子関係と青少年の非行的態度Ⅳ
——親子関係, 恥意識, 非行的態度の関連性——

中村 真*・松井 洋**
堀内 勝夫***・石井 隆之****

Parent-Child Relationships and Attitudes Toward Delinquency
in the Youth IV

Shin NAKAMURA, Hiroshi MATSUI, Katsuo HORIUCHI, Takayuki ISHII

要 旨

我々は、一連の研究（中里・松井，2003，2007など）において、恥意識が非行的態度を抑制する強力な要因の一つであること、および、恥意識が親子関係を基盤にして形成されることを明らかにしてきた。しかし、これらの研究では、恥意識を構成する各因子（自分恥，他人恥，仲間恥）がもたらす非行抑制効果を主としてクロス集計や単純相関分析の結果から論じている。また、親子関係を“親密さ”という単一の指標で把握してきたが、子どもの意識・態度を健全に育むためには厳しさをともなう躰の重要性も指摘されている。以上をふまえて、本稿では、これまでに得たデータを新たな視点から分析する（パス解析）ことによって、親子関係，恥意識，非行許容性の因果関係を明らかにしようと試みた。主な結果は、①自分恥と他人恥が非行許容性を抑止する要因であり、その傾向が他人恥で顕著であること、②仲間恥には非行許容性を促進する効果があること、③親子関係の親密さに加えて、親からのしつけが恥意識の形成に影響を及ぼすこと、であった。そして、これらの分析を中学生と高校生に分けて実施し、親子関係と恥意識および非行許容性の影響関係を世代間で比較検討し、今後の研究課題を述べた。

キーワード：親子関係，恥意識，非行許容性，パス解析

*准教授 社会心理学

**教授 社会心理学

***産業能率大学

****日本精神技術研究所

[問題と目的]

我々は、青少年を対象とする継続的な調査を通じて、恥意識が非行的態度を抑制する強力な要因の一つであること、および、恥意識が親子関係を基盤にして形成されることを明らかにしてきた（中里・松井，2003；中里 他，2003；中村 他，2004；松井 他，2005；中村 他，2005；中里 他，2005；中里・松井，2007；中村 他，2007；中村 他，2009）。

これらの研究では、恥意識が自分恥，他人恥，仲間恥から成ることを見出している。そこで明らかになった非行的態度の抑制要因としての恥意識とは、自らの行為が自分で決めた基準に合致しないときに生じる恥（自分恥）と、自分の行為と大人に代表される他者の基準や社会規範との間にズレを感じたときに生じる恥（他人恥）である。そして、非行抑制機能は他人恥においてより顕著であるという一定の研究成果をもたらした。

しかし、恥意識の非行抑制効果は、主にクロス集計や単純相関の結果に基づいて得られた知見であり、変数間の詳細な因果関係についてはまだ十分に解明されていない。

一方、恥意識には非行を抑制しない因子（仲間恥）が存在することも見出されている（中里・松井，2007）が、一連の研究の主眼が非行抑制効果にあったため、この因子と非行的態度との関係については詳細な検討が行われなかった。また、親子関係と恥意識の関連を主として親子の親密さに焦点を絞って明らかにしてきたが、子どもの意識・態度を健全に育むためには、親子の親密さを前提としつつも、ときには厳しさや恐さをともなう躰を取り入れることが重要である（中里・松井，2007）との指摘もみられる。以上をふまえて、本稿ではこれまでに得た調査データを新たな視点から再分析することによって次の3点を検討する。

- (1) 青少年の恥意識の構造を確認したうえで、恥意識を構成する各因子と非行的態度との関連をパス解析により詳細に検討する。
- (2) 青少年における親子関係を従来の「親密さ」に「しつけ」の要素を加えて多次的に把握し、それらと恥意識の関連をパス解析により検討する。併せて、恥意識の形成に及ぼす親子関係の影響が父子関係と母子関係で異なるかどうかを比較検討する。
- (3) (1)(2)を中学生と高校生に分けて分析し、親子関係，恥意識，非行的態度の関連を世代間で比較検討する。

[方法]

調査対象は、北海道，青森県，茨城県，静岡県の中学生（男子195名，女子207名，性別不

明3名)、高校生(男子487名、女子158名、性別不明3名)の計1053名であった。

調査期間は、2004年9月～12月であった。各学校においてホームルームなどの時間中に集合調査を実施した。

質問紙は、父および母との関係(「そうである」～「そうでない」の4件法、14項目)、非行許容性(「たいしたことはない」～「非常に悪いことだ」の4件法、10項目)、道徳意識(4件法、10項目)、愛他性(4件法、8項目)、恥意識(「非常に恥ずかしい」～「まったく恥ずかしくない」の4件法、25項目)、価値観(4件法、12項目)に関する質問およびフェースシートから構成された。このうち、本稿では親子関係、非行許容性、恥意識を分析に用いた。

[結果]

1. 親子関係の構造

子どもからみた親子関係の構造を把握するために、父との関係に関する14項目を用いて因子分析を行った。因子負荷が1つの因子について0.30以上で、かつ、2因子にまたがって0.30以上の負荷を示さないという基準で最終的に2因子(重みなし最小二乗法、プロマックス回転)を抽出した(表1)。

第1因子は、「父が好きだ」、「父とはうまくいっている」、「父を尊敬している」など5項目に対して負荷量が高く、「親密さ」因子とした。第2因子は、「父から人に親切にすることの大切さを教わった」および「父からがまんすることの大切さを教わった」の2項目の負荷量が高く、「しつけ」因子とした。 α 係数は、それぞれ十分な内的整合性を示している。そこで、以降の分析では、父子関係の指標として各因子ごとの合成得点を用いることとした。

次に、母子関係の構造を把握するために、母との関係に関する14項目を用いて因子分析を行った。父子関係と同じ基準で分析を繰り返し、最終的に2因子を抽出した(表2)。第1因子は、「母が好きだ」、「母を尊敬している」など5項目で負荷量が高く、「親密さ」因子とした。第2因子は、「母から人に親切にすることの大切さを教わった」、「母からがまんすることの大切さを教わった」の2項目の負荷量が高く、「しつけ」因子とした。 α 係数の値は両因子とも高く、十分な内的整合性を示している。したがって、後の分析では、母子関係の指標として各因子の合成得点を用いることとした。

表1と表2に示した通り、因子分析の結果により示された親子関係の構造は、父子関係と母子関係でまったく同じ構造となっている。

表1 親子関係の因子分析結果（父子関係）

項目	因子1 親密さ	因子2 しつけ
私は父が好きだ	.961	
父とはうまくいっている	.832	
父を尊敬している	.671	
私は父に愛されていると思う	.623	
父のようになりたい	.541	
父から人に親切にすることの大切さを教わった		.884
父から「がまん」することの大切さを教わった		.755
α 係数	.87	.79

表2 親子関係の因子分析結果（母子関係）

項目	因子1 親密さ	因子2 しつけ
私は母が好きだ	.981	
母とはうまくいっている	.781	
母を尊敬している	.700	
私は母に愛されていると思う	.663	
母のようになりたい	.568	
母から人に親切にすることの大切さを教わった		.902
母から「がまん」することの大切さを教わった		.793
α 係数	.89	.86

2. 非行許容性

本稿では青少年の非行的態度の指標として非行許容性を用いる。まず、非行許容性の構造を把握するために10項目を用いて因子分析（重みなし最小二乗法，プロマックス回転）を行い、固有値1以上の基準で2因子を抽出した（表3）。第1因子は「夜遅くまで外で遊ぶ」など6項目で構成されている。これらは社会的逸脱行為への許容性を示しており、「不良行為の許容性」とした。第2因子は、「人の物を盗む」など4項目から成る。明らかな犯罪行為であるので、「犯罪許容性」とした。なお、 α 係数の値は、それぞれ十分な内的整合性を示している。

3. 恥意識の構造

表4は、恥意識の項目を因子分析した結果を示したものである。恥意識に関する25項目について、因子分析（重みなし最小二乗法，Kaiserの正規化を伴うプロマックス法による回転）を行った結果、因子負荷が1つの因子について0.30以上で、かつ、2因子にまたがって0.30以上の負荷を示さないという基準で3因子を抽出した。第一因子は、『努力が足りなくて目標

親子関係と青少年の非行的態度Ⅳ

表3 非行許容性の因子分析結果

項目	因子1 不良行為	因子2 犯罪
エッチな雑誌やアダルトビデオを見る	.834	
異性の友達と二人で泊まる	.825	
酒を飲む	.799	
夜遅くまで外で遊ぶ	.772	
タバコを吸う	.582	
学校をサボる	.536	
人の物を盗む		.902
ちょっとしたものを万引きする		.752
覚醒剤などの薬物を使う		.611
ケンカをして怪我をさせる		.322
α 係数	.88	.74

表4 恥意識の因子分析結果

項目	因子1 自分恥	因子2 他人恥	因子3 仲間恥
自分で決めたことを守れなかったとき	.858		
友達との約束を破ってしまったとき	.707		
自分が正しいと思ったことができなかったとき	.589		
親との約束を破ってしかられたとき	.585		
悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき	.583		
努力が足りなくて目標が達成できなかったとき	.544		
試験勉強をしようとして決めていたのになまけてしまったとき	.539		
友達に自分の気持ちをはっきり言えなかったとき	.444		
授業に遅れて先生にしかられたとき		.729	
宿題を忘れて先生にしかられたとき		.719	
電車やバスで携帯電話をかけて大きな声を出したとき		.554	
とめてはいけないところに自転車を止めたとき		.537	
かんでいたガムを道ばたにすてたとき		.498	
家で自分だけ勝手なことをしてしかられたとき		.462	
友達に自分の失敗を笑われたとき		.395	
静かな病院の中で大声でさわいでしまったとき		.378	
みんなが知っている話を自分だけ知らなかったとき			.736
自分だけが流行の物をもっていなかったとき			.607
町で自分のファッションを変な目で見られたとき			.527
みんなができることを自分だけできなかったとき			.444
自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき			.355
α 係数	.85	.82	.72

が達成できなかったとき』、『自分で決めたことを守れなかったとき』、『悪いことをしたのにだまってそれをかくしているとき』、『自分が正しいと思ったことができなかったとき』など、自分の行為を自ら省みたときに恥ずかしいという気持ちを表す8項目で構成されており、「自分

恥」とした。

第二因子は、『授業に遅れて先生にしかられたとき』、『家で自分だけ勝手なことをしてしかられたとき』など、他者を意識したときに恥ずかしいという気持ちを表す8項目で構成されており、「他人恥」とした。

第三因子は、『自分だけその場にふさわしくない服装をしていたとき』、『自分だけが流行の物をもっていなかったとき』など、他者と異なる自分を恥ずかしいという気持ちを表す5項目で構成されており、「仲間恥」とした。なお、 α 係数の値はそれぞれ十分に内的整合性が高いことを示している。

このように、恥意識は自分恥、他人恥、仲間恥の3つの要素で構成されている。恥意識の構造は中里・松井(2007)と同じ内容であることが確認された。自分恥は自分自身に向けられた恥意識であり、親、先生、社会など自分以外の他者との関係で生じる恥が他人恥である。そして、同じ他者でも特に友達との関係で生じる恥を仲間恥とした。

4. 親子関係と恥意識および非行許容性の影響関係

表5は、各変数の平均と標準偏差を示したものである。

表5 各変数の平均と標準偏差

	父と親密	父のしつけ	母と親密	母のしつけ	自分恥	他人恥	仲間恥	不良行為許容	犯罪許容
M	2.73	2.61	2.86	2.82	2.66	2.65	2.95	3.02	1.71
SD	.78	.94	.77	.93	.62	.58	.60	.81	.64

図1～図3は、親子関係と恥意識および非行許容性の関係を示したパスダイアグラムである。図1は中学生と高校生を対象とするパス解析の結果を示したものであり、図2は中学生のみを、図3は高校生のみを対象とする結果である。なお、図中の数値は標準偏回帰係数を示したものである。また、図中の+、*、**、***は、それぞれ、 $p<.10$, $p<.05$, $p<.01$, $p<.001$ を意味する。

それぞれのパス解析におけるGFI, RMSEAなどの値は、適合度が高く、モデルのあてはまりが良いことを示している。

中高生全体を対象とするパス図(図1)を見ると、他人恥は不良行為および犯罪行為に対する許容性を抑制することが示されており、その関係は前者において顕著である。また、自分恥は、犯罪許容性をやや抑制するが不良行為の抑制には影響しない。一方、仲間恥は犯罪許容性

親子関係と青少年の非行的態度Ⅳ

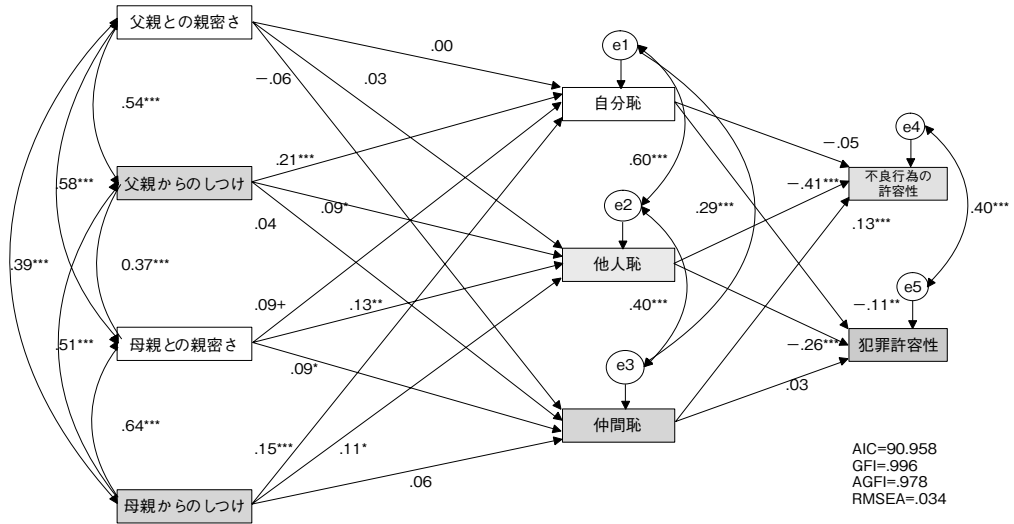


図1 親子関係、恥意識、不良行為・犯罪許容性のパス

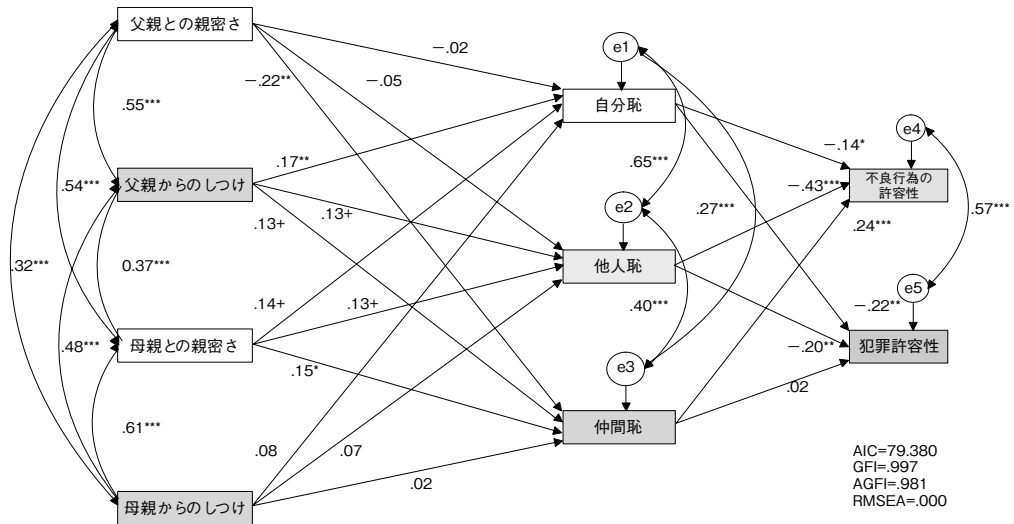


図2 親子関係、恥意識、不良行為・犯罪許容性のパス（中学生）

には影響しないが、不良行為の許容性を促進する関係性が示された。

恥意識に対する親子関係の影響は以下の通りである。すなわち、自分恥と他人恥は両親からのしつけによって高まること、母親との親密さは恥意識全般を高めるが、父親との親密さは恥意識に影響しないことが示された。

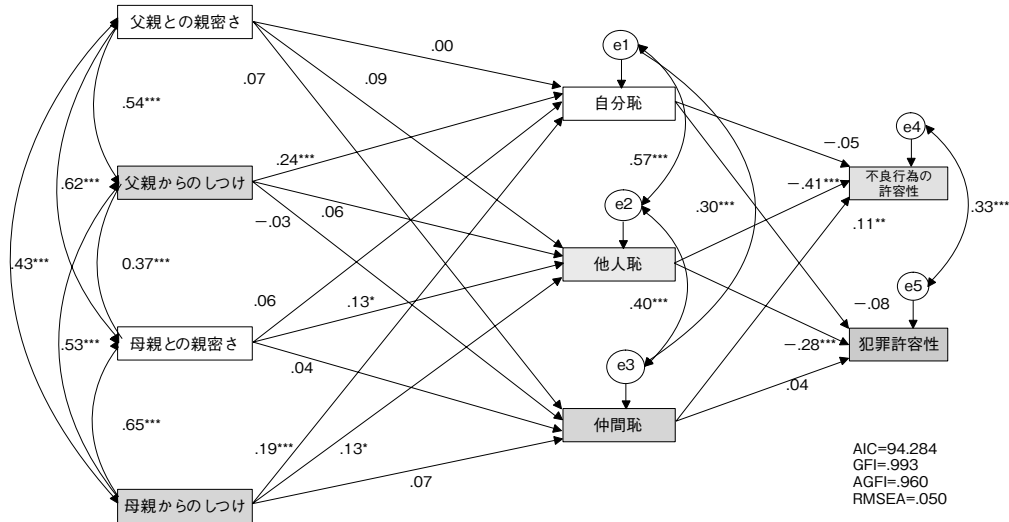


図3 親子関係、恥意識、不良行為・犯罪許容性のパス（高校生）

次に、中学生のみを対象とするパスダイアグラム（図2）は、他人恥が不良行為および犯罪行為に対する許容性を抑制することを示しており、その影響は不良行為に対して顕著である。そして、自分恥においても犯罪許容性に対する許容性を抑制すること、および不良行為の許容性をやや抑制する傾向が示された。仲間恥は、犯罪許容性には影響しないが、不良行為に対する許容性を促進する関係性が認められる。

中学生の恥意識に対する親子関係の影響については、父親からのしつけと母親との親密さが恥意識全般の高さに影響していること、そして、父親との親密さが仲間恥を抑制する傾向があることを示している。また、母親からのしつけは恥意識に影響しないことが示された。

高校生のみを対象とするパス解析の結果（図3）、他人恥は不良行為および犯罪行為に対する許容性を抑制することが示されており、その関係は前者において顕著である。自分恥は不良行為ならびに犯罪行為に対する許容性には影響しない。仲間恥は犯罪許容性には影響しないが、不良行為の許容性を促進する関係性が示された。

高校生の恥意識に対する親子関係の影響は、両親からのしつけが自分恥を高めること、他人恥は、母親からのしつけと母親との親密さによって促進されること、仲間恥は親子関係と関連しないことが示された。

[考察]

1. 恥意識の非行抑制・促進効果（中学生全体の結果から）

中学生全体を対象とするパス解析の結果は、次のことを示した。まず、恥意識は不良行為・犯罪に対する態度に影響する要因であり、なかでも他人恥には不良行為・犯罪に対する許容性を抑制する効果がある。そもそも、不良行為は社会基準からの逸脱行為である。したがって、自らの行為と周囲（社会）の目（基準）との相違が原因となって生じる他人恥が不良行為の許容性を抑止するものと考えられる。一方、犯罪行為も社会基準からの逸脱行為であるので、他人恥は犯罪に対する許容性も抑制する効果があると言える。しかし、その逸脱の程度は一般の社会基準とはあまりにもかけ離れたものであるために、他人恥の犯罪に対する抑止効果がやや減じるのではないかと考えられる。

自分恥は、犯罪許容性を抑制するが、不良行為に対する許容性とは関連しない。自分恥は、自らの行為が自分の定めた基準に合致しないときに生じる恥意識である。社会基準からの明らかな逸脱である犯罪行為は自分の基準とも相違することが多いと考えられるので、自分恥が犯罪行為に対する許容性を抑止する効果をもつと思われる。しかし、不良行為などの軽微な逸脱行為は、必ずしも自分の基準と相違するとは限らないので、自分恥は不良行為の許容性を抑止するものではないと言える。

本稿におけるパス解析によって、一連の先行研究では注目しなかった仲間恥にも非行的態度との関連性があることが見出された。しかも、その関連性は不良行為に対する許容性を促進するというものであった。仲間恥は、自分の行為が身近な友人の基準と一致しない場合に生じる、いわば仲間と同調する過程で生じる恥意識である。中学生は、身近な仲間と徒党を組み、大人に代表される社会基準からやや逸脱した行為をむしろ「かっこいい」、「英雄的」などと考え、それを仲間うちで共有しがちである。逆に言うと、大人や社会の基準に逆らわずに従順であることを「かっこ悪い」とか「ダサイ」と考える傾向にあると思われる。したがって、仲間恥が不良行為を許容することに影響するのだと考えられる。

2. 親子関係が恥意識の形成に及ぼす影響（中学生全体の結果から）

パス解析の結果、不良行為・犯罪に対する許容性を抑止する効果のある自分恥と他人恥は、両親からのしつけによって高まる傾向があることが示された。また、母親との親密さは恥意識全般に影響するが、父親との親密さは影響しないことも示された。一連の先行研究では、非行抑止要因としての恥意識が親子関係の親密さを基盤にして形成されることが一貫して確かめら

れているが、本稿の分析によって、子どもの恥意識の形成には、親密さだけではなく、しつけも重要な役割を果たしていることが示唆された。したがって、非行抑止的な態度の形成には、親への憧れや尊敬、愛情に裏付けられた親密な親子関係を基盤としつつも、具体的で厳しさをともなった親からのしつけが重要であると言えよう。加えて、子どもの恥意識の形成に及ぼす親子関係の影響は、父子関係と母子関係で異なる様相を呈していることもうかがわれ、非行抑止要因としての恥意識は両親のしつけと母親との親密さが比較的大きな影響を及ぼしているものと思われる。

3. 親子関係と恥意識および非行許容性の影響関係（中学生と高校生の世代間比較）

①恥意識の非行抑制・促進効果

恥意識と非行許容性の関連を中学生と高校生で比較すると、他人恥には不良行為および犯罪に対する許容性を抑制する傾向があるという点は共通している。

しかし、中学生では自分恥が不良行為および犯罪行為の許容性を抑制するのに対して、高校生では自分恥が不良行為だけではなく犯罪行為に対しても抑制効果をもたないことが示された。その原因は、「自分の基準」が中学生と高校生で異なっていることに起因するのではないかと考えられる。つまり、中学生にとっての「自分の基準」は、善悪判断に関わる領域に該当する割合が多いのに対して、高校生の考える「自分の基準」は、成長にともなって善悪判断の他にも生き方などの価値観を含む多様な領域に拡大しているものと予測される。高校生では、自分の行為が自分の基準に一致しないときに生じる自分恥が善悪判断以外の領域においても生じる可能性が高く、したがって、自分恥の高さが必ずしも非行許容性の抑止に影響するわけではないことがうかがわれる。しかしながら、これはあくまでも推察であり、自分恥の様相が世代間で異なるかどうかを含めて、今後の研究課題として位置づけられる。

仲間恥が不良行為に対する許容性を促進することは、中学生と高校生の両方で見られたが、その傾向は中学生においてより顕著であった。このことは、身近な仲間集団に同調するという思春期に特有の心性が、自己同一性がまだ十分に確立されていない中学生で高く、自己同一性が確立されつつある高校生では仲間への同著傾向が次第に減少することに起因するものであると考えられる。これについても実証的な検証を視野に入れて継続的に検討する必要がある。

②親子関係が恥意識の形成に及ぼす影響

親子関係が恥意識の形成に及ぼす影響については、中学生と高校生で異なる様相を示した。中学生では、父親からのしつけと母親との親密さが非行抑止効果のある自分恥と他人恥を高め

る傾向が見られた。この結果は、父親の厳しさと母親の包容力が子どもの非行抑止的な態度の形成に影響していることを示唆する。また、父親との親密さは、仲間恥を減じる、という傾向が見られた。仲間恥は不良行為に対する許容性を促進する機能がある。したがって、父親とのあいだに親密な関係を構築している中学生は、些細なことで仲間と不一致であっても恥じらうことなく自らの判断で対処できている可能性が示唆される。このことは、中学生の非行抑止的な態度を育むうえで重要であるが、父親との親密さが仲間恥を抑制する理由については今後の課題として検討していく必要がある。

高校生では、父親からのしつけが自分恥を促し、母親との親密さが他人恥を促すこと、そして、母親からのしつけが自分恥と他人恥を高める傾向が見られた。これらの結果は、次のように解釈することも可能であろう。すなわち、高校生は両親のしつけによって自分恥（内面）が育まれ、母親との関係（親密さとしつけ）によって、他人恥（他者や社会の価値基準）が育成されると考えられる。

以上のように、中学生と高校生では、親子関係と恥意識の関連性が微妙に異なっており、発達の視点からこの問題をさらに詳細に検討することによって、青少年の非行的態度を抑止する恥意識の育成方法を明らかにすることができるものとする。

【文献】

- 松井 洋, 中里至正, 片山美由紀, 中村 真, 堀内勝夫, 2005, 「非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究」, 『(財)社会安全研究財団 平成 15 年度研究助成報告書』, pp.43-56.
- 中村 真 他, 2004, 「恥意識の行動抑制力に関する研究 (3)一親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響」, 『日本社会心理学会第 44 回大会発表論文集』
- 中村 真 他, 2005, 「親子の心理的距離と恥意識の関係」, 『日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集』
- 中村 真 他, 2007, 「親子関係と青少年の非行的態度Ⅱ—親子双方の視点から—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 18 巻, 第 1 号, pp.123-140.
- 中村 真 他, 2009, 「親子関係と青少年の非行的態度Ⅲ—親からみた親子関係と恥意識の形成—」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 20 巻, 第 1 号, pp.91-101.
- 中里至正, 松井 洋, 2003, 『日本の親の弱点』, 毎日新聞社
- 中里至正, 松井 洋, 2007, 『「心のプレーキ」としての恥意識—問題の多い若者たち—』, プレーン出版
- 中里至正 他, 2003, 『非行抑制要因に関する社会心理学的研究 平成 13 年度～平成 14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書』
- 中里至正 他, 2005, 『恥意識の行動抑制力に関する社会心理学的研究 平成 15 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) 研究結果報告書』